



家庭科における地域課題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡田, みゆき, 山口, 菜々子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000103

家庭科における地域課題

岡田みゆき・山口菜々子

北海道教育大学旭川校家庭科教育研究室

Regional Issues in Home Economics Education

OKADA Miyuki and YAMAGUCHI Nanako

Department of Education, Asahikawa Campus, Hokkaido University of Education

概要

本研究では、家庭科教師としての指導力を高めるため、大学生16名を対象に、旭川市の課題を理解し、課題を解決するための家庭科の授業を開発し、中等家庭科教育法Ⅲで実施した。そして、学生の地域課題に関する理解と対応について評価するとともに、ICT活用や地域課題の教材化の有効性についても検証することを目的とした。

その結果、地域課題については、学生の興味は低く、よく理解はしていないが、知る機会を与えると意欲をもって、自分にできることを考えようとする。そのため、今回授業を行うことで、学生は旭川の課題を理解し、その解決策を考えることができた。地域課題の教材化については、難しさがあると感じている学生が多いが、資料や調べるサイトの提供、内容の吟味や時間の配分などの手立てを講じることで、教材化することは可能であると考えていた。ICTの活用は意見を共有したり、まとめたりする上でとても便利であると学生は捉えていた。

1. 研究の目的

地域ごとに現れる特有の課題は地域課題と呼ばれている。地域課題を解決する機関として、政府並びに都道府県や市町村の公的機関が挙げられる。その他、民間企業も地域課題を解決するために活動を行っている。中小企業庁（2015）では地域課題を解決する中小企業・NPO法人の100の取り組みが紹介されている。少子高齢化に関する取り組みや、健康・医療に関する取り組み、介護・福祉に関する取り組みなどその取り組みの内容はさまざまである。学校教育においては、主に地域課題を解決する担い手を育成することが求められている¹⁾。

地域を学習対象にする教科は、家庭科よりも社会科がその中心である。しかし、生活は地域と不可分に営まれていることから、生活を対象とする家庭科は常に地域を意識して実践を積み上げてきた。社会科では「地域」を社会システムとして捉えているが、家庭科はさらに個々の生活主体やその活動に注目しているところ

に相違がある。

小学校学習指導要領解説家庭編では²⁾、家族や地域の人々と関わること、社会に参画することが十分でないことに課題があることから、家庭や地域と連携を図った生活の課題と実践に関する指導事項を設定することや実践的な活動を家庭や地域で行うことと記載されている。また、中学校学習指導要領解説技術・家庭編では³⁾、「家族・家庭や地域における生活の中から問題を見いだして課題を設定し、解決策を構想し、実践や評価・改善し、考察したことを倫理的に表現するなど、これからの生活を展望して課題を解決する力を養う」と記載されている。さらに、高等学校学習指導要領「家庭」の目標には⁴⁾「よりよい社会の構築に向けて、男女が協力して主体的に家庭や地域の生活を創造する資質・能力を育成することを目指す」と記されている。つまり、家庭科は地域課題を解決する担い手の育成に関わる重要な教科であると言える。

それでは、地域課題を解決する担い手を育成するには、どのようにすべきであろう。それは、第一に、地域課題を授業で取り上げることである。柳は⁵⁾、地域を知ることによって改善する力を育み、そのことによって住民からの共感を得られると述べている。また、教師自身が地域教材を開発することを通して「地域に根付く」ことができ、地域課題を解決する担い手になるとも述べている。また、久保も⁶⁾、子どもたちを地域再生の主体に育てるという視点を持った授業は少ないので、家庭科教師が地域の課題を解決する力を生徒に育てることは必要だと指摘している。この他、小澤⁷⁾、荒井⁸⁾なども家庭科教育で育みたい能力として、「身近な人とよりよい人間関係を築き社会参画へつないでいくコミュニケーション力を付けていくこと」、「地域や暮らしの知恵や豊かさを継承し、発展させる力をつけていくこと」、「生活の場から社会の問題をみつめ、課題を把握して改善や解決を図ること」と指摘している。つまり、個々の児童・生徒の具体的生活と結びついた学びを展開するために、地域教材を取り入れた家庭科の授業が求められていると考えられる。

地域教材を取り入れた家庭科の授業を開発するために、家庭科教師には何が求められているだろうか。久保は⁶⁾家庭と地域の課題を把握し、学校を地域に開き、つながりを生かした授業を編成することが、新しい時代に求められる教師の専門力量の一つであると述べている。桑畑他も⁹⁾、「地域に根差した教育実践や生活実践を追及したり、地域の人々の思いや動きをキャッチする感性やネットワークを保有することが教員には求められている」と述べている。さらに、秋田大学の学生地域交流事業「秋田大学オフィシャルいぶりがっこ製造プロジェクト」では、大学生が家庭科教育の実践研究を深めるために、その基盤となる地域における衣生活、食生活、住生活、家族と家庭生活における課題を見出し、その課題解決にかかわる研究に取り組んでいるという報告もある¹⁰⁾。

以上のことから、地域課題を解決する担い手を育成するためには、地域教材を取り入れた家庭科の授業開発が必要であるし、そのような授業を開発するためには、家庭科教師自身が地域を知り、地域課題を見だし、解決するという経験が必要であると言える。

しかしながら、地域の課題に目を向けさせているものの、地域がおかれている状況を理解する、あるべき未来像を描くなど地域の内実に迫る部分が充実している授業実践は多いとは言い難い¹¹⁾、地域における生活課題の解決をめざす様々な取り組みを実践できる教師も少なく、その養成が急務である⁹⁾と言う。つまり、将来、家庭科教師となる学生自身が地域課題を解決するという経験が必要である。

また、家庭科においては、日常生活の中から問題を見いだして課題を設定したり、解決したりする際に、情報通信ネットワークを活用して調べ、その情報を収集・整理することが重要であると言われている。そして、情報の収集・整理のみならず、実践の結果をまとめて発表する際にもコンピューターを活用することは有効であると考えられている²⁾。

そこで、本研究では、家庭科教師としての指導力を高めるため、大学生を対象に、旭川市の課題を理解し、課題を解決するための家庭科の授業を開発することを目的とする。その際、様々な場面でICTを活用するよ

うに、授業を構成する。そして、学生の地域課題に関する理解と対応について評価するとともに、ICT活用や地域課題の教材化の有効性についても検証することを目的とした。

2. 研究の方法

(1) 研究対象

研究対象者は、本大学生生活・技術教育専攻の3年生16名（男子学生4名、女子学生12名）である。授業は、2023年1月、中等家庭科教育法Ⅲで実施した。なお、授業は講義に参加している学生が行った。

(2) 授業内容

表1 学習指導案

段階	○学習内容	□教師のはたらきかけ	◎評価・留意点
導入 (10分)	○旭川市の課題として考えられるものを挙げる。 〈予想される解答〉 人口減少、貧困、消費者問題、気候、積雪、交通機関、川…	□旭川市の課題としてどのようなものが挙げられるか問う。	・PWに打ち込むことでメモとする。 ・出なかった地域課題は紹介をする。
展開 (60分)	○与えられたテーマに対する課題を個人で考え、その後グループでまとめる。 (30分) ○調べた課題の発表を行う。他の班の発表に対する質問や意見を持つ。 (1班2.5分×4グループ=10分) ○グループで課題に対する解決策を調べたり考えたりする。 (10分) ○調べたり、考えたりした解決策について発表する。他の班の発表に対する質問や意見を持つ。 (1班2.5分×4グループ=10分)	□4人ずつ計4つのグループに分け、4つのテーマ「人口減少」「貧困」「消費者問題」「気候問題」に対する課題を調べてまとめさせる。 □テーマに対する課題を発表させる。 □グループごとに、調べた課題の解決策を考えさせる。(家庭内や個人の生活において実践できること・意識できること) □課題に対する解決策について発表させる。	・各グループに配られた資料を参考にする。 ・インターネットを活用して調べる。 ・タブレット内にまとめて発表の準備をする。 ・質問を受け付ける。 ・タブレット内にまとめて発表の準備をする。 ・質問を受け付ける。
まとめ (10分)	○本時の振り返りを行うとともに、地域課題の教材化について検討する。 (10分)	□本時の振り返りを各自で行わせる。「旭川市について学習し、どのようなことを考えたか。また、地域課題の教材化をどのように考えるか。」	・振り返りをタブレット内に記入する。

最初に、授業で取り上げる地域課題を検討するため、旭川市のホームページを参照し、その中から、生活の視点から解決できそうなテーマを選択した。選択したテーマは、人口減少、貧困、消費者問題、気候の変化の4つである。次に、大学生においても授業時間内に、それぞれのテーマの課題や解決策を考えることは

難しいと考え、各テーマに関する資料を作成した。資料には、主に旭川の人口の推移、移動数の推移、平均所得や他の都道府県との比較、生活保護率、消費者問題の件数の推移、降水量の推移、気温など数値的なデータ及び調査するためのサイトのアドレスなどが記載されている。最後に、どの学生も地域課題に対する解決策が考えられ、その意見が反映されるようにするため、Jamboardを使用し、前時に、Jamboardの使用方法を学生全員が学んだ。

開発した授業の学習指導案は表1に示す通りである。授業を構成するにあたって、以下の3視点を取り上げた。

- ① 旭川の課題について、資料やインターネットを使用し、理解する。
- ② 生活の視点から課題に対する解決策を考え、Jamboardに記載し、それを基にグループ内で交流する。
- ③ 教師の立場から、地域課題の教材化やICTの有用性について検討する。

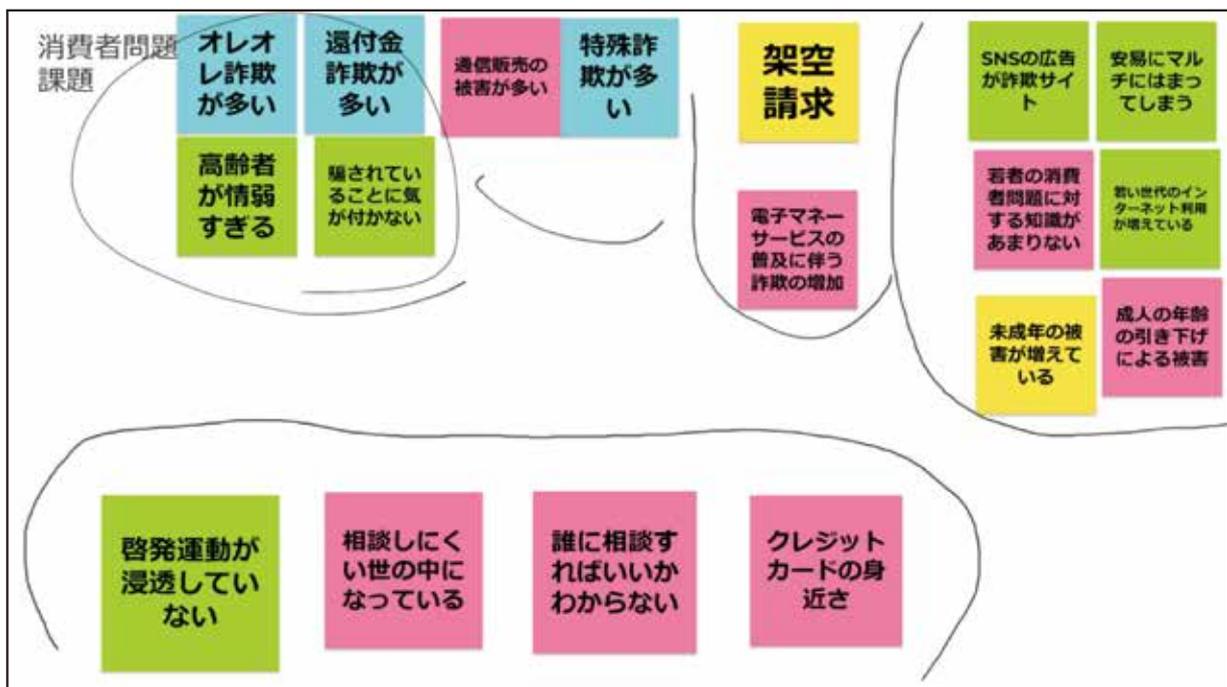
(3) 分析方法

授業で使用したJamboardを分析資料とした。Jamboardには、「テーマの課題」、「課題の解決策」、「旭川の課題について」、「教材化について」、「ICTの活用について」の5項目について自由に記述させ、記述内容からカテゴリーを形成して結果を整理した。

3. 結果と考察

(1) 旭川の課題について

図1はテーマ「消費者問題」の課題とその解決策を記載したものである。このグループは一人一色を使い、誰が何を記述したか、わかるようにしていた。図1から、全員が課題と解決策を考えることができたことがわかる。また、各自が記載したものを、グループ内の交流を通して、内容を分類していたことも理解できる。なお、他のテーマも同様の状況で、全員が課題を理解し、その解決策を考えることができた。



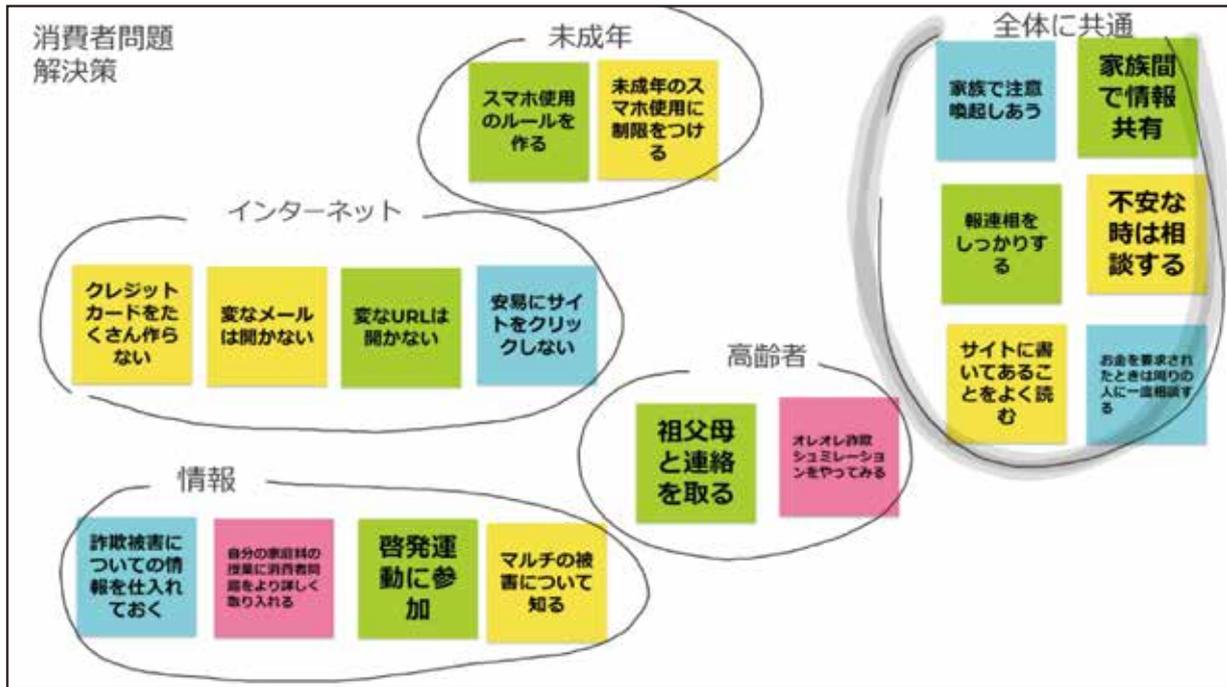


図1 旭川市の消費者問題の課題と解決策

表2は、授業のまとめで「旭川の課題について」の感想をJamboardに記述してもらった結果である。記述から、具体例を抜粋し、カテゴリーを形成したもので、「地域課題」と「解決策」の2つのカテゴリーに分けられた。また、記述した学生の数をカウントした結果も記載した。

表2 旭川の課題について

	内 容	記述数
地域課題 (21)	思っていたよりも多い・深刻	7
	旭川市について考える機会になった	5
	身近なものとして考えられた	3
	意識していなかった点を意識できた	2
	一人や家庭では難しい課題	2
	今後について考えられた	1
	自分の住む地域について知ろうと思った	1
解決策 (14)	自分にも出来ることがあると思った	5
	自分にも出来ること・改善策を探そうと思った	3
	できることは多いがやっていないだけだと感じた	1
	自分の取り組みが大切だと思った	1
	自分の健康を保とうと思った	1
	手助けしたい	1
	適応できる工夫も大切	1
自分たちに出来ることは少ない	1	
合計		35

表2から「地域課題」(21名)の感想を全員が記述していた。中でも、「思っていたよりも多い・深刻」と記述した学生が7名と最も多く、半数近い学生が旭川の課題について、よく理解していなかったことがわかる。また、「旭川市について考える機会になった」、「身近なものとして考えられた」、「意識していなかった点を意識できた」などの意見を加えると、ほとんどの学生が旭川の課題を知らなかったもしくは意識していなかったことがわかる。その理由として、学生の半数が旭川出身ではないということは挙げられる。しかしながら、そもそも学生自身が地域課題について関心が低いことも理由として挙げられるのではないだろうか。また、地域について考える機会もなかったものと思われる。

次に、「解決策」の感想も多く多くの学生が記述していた。中でも、「自分にもできることがあると思った」と記述した学生が5名と最も多かった。「自分にできること・改善策を探そうと思った」を加えると、半数近い学生が旭川の課題について、自分でできることを考えようと意欲を持っていることがわかる。

以上のことから、学生は地域課題についてはよく理解していないことが多いが、知る機会があれば、それについて自分でできることを考え、取り組もうとする意欲があることがわかった。

表3 教材化について

項目(総数)	内 容	記述数
授業形式(19)	資料を与える・わかりやすくする	5
	調べるサイトの例を示す	3
	ヒントを与える	1
	内容を減らす	1
	時間を増やす	1
	机間指導でアドバイスをする	1
	ジャムボードなどのICTを活用する	1
	他のグループの発表の際に意見を書き込む	1
	発言機会を増やす	1
	指示を明確にする	1
	調べる活動をメインにする	1
	導入での問題意識の醸成する	1
	教科横断的な授業構成にする	1
	テーマ(地域課題)(6)	全員が全ての地域課題について考える
地域課題ごとに一つずつ行う		1
行政・家庭の双方から考えさせる		1
魅力についても考えさせる		1
課題によっては考えづらいものもあるので吟味する		1
合計		25

(2) 教材化について

表3は、授業で使用したJamboardに記述してもらった結果である。記述から、具体例を抜粋し、カテゴリーを形成したもので、「授業形式」と「テーマ(地域課題)」の2つのカテゴリーに分けられた。

表3より、「授業形式」(19名)の感想を全員が記述していた。中でも、「資料を与える・わかりやすくする」(5名)が最も多かった。次は「調べるサイトの例を示す」(3名)であった。他は、意見が散見しているが、

どの意見も何らかの手立てを講じなければ、授業が成立しないと考えていることがわかる。その手立てとして、わかりやすい資料を作成したり、すぐに調べられるようにサイトを紹介したりする必要性を述べていた。また、机間指導や導入の工夫、指示の明確化なども挙げていた。さらに、時間がかかることを予想し、内容を減らしたり、時間を増やしたりすることを挙げていた学生もいた。

次に、「テーマ（地域課題）」の感想を6名の学生が記述していた。記述した学生は少なかったが、地域課題を取り上げることの大切さを感じた学生もいた。ただ、取り上げる際は、全員が同じテーマを扱うことや、課題を吟味することも必要だと述べている。また、課題だけではなく、魅力も取り上げることを挙げた学生もいた。

以上のことから、地域課題の教材化については、難しさがあると感じている学生が多いことがわかる。取り上げる際には、生徒の実態をよく理解した上で、資料や調べるサイトの提供や、内容の吟味や時間の配分などの手立てを講じることが大切であると指摘していた。

(3) ICTの活用について

表4は、ICTの活用について授業で使用したJamboardに記述してもらった結果である。記述から、具体例を抜粋し、カテゴリーを形成したもので、「長所」、「短所」、「その他」に分類できた。

表4 ICTの活用について

項目（総数）	内 容	記述数
長所（22）	意見を共有しやすい・まとめやすい	11
	発表しやすい	2
	分類分けを行いやすい	2
	調べ学習に良い	2
	学習しやすい	1
	意見がすぐに反映される	1
	書くよりも楽	1
	楽しさを感じた	1
	SDGsの観点から良い	1
短所（9）	使い慣れていないと難しい・使いにくさ	3
	時間配分が合っていなかった	3
	タイピング技術の問題や差がある	2
	話し合いによるコミュニケーションが減った	1
その他（4）	小学生では難しい	1
	他の人のアカウントで入らないようにする	1
	遊ばないようにする	1
	まとめ方の指示を明確にする	1
合計		36

表3より、「長所」（22名）については、全員が記述していた。中でも、「意見を共有しやすい・まとめやすい」（11名）が最も多かった。この他にも、学習のしやすさや意見がすぐに反映されるなど、ICT活用のよさが述べられていた。他方、短所についても9名の記述があった。使い慣れていないと難しいや時間がか

かるやコミュニケーションが減るなどの問題も指摘されていた。

以上のことから、ICTの活用は意見を共有したり、まとめたりする上でとても便利であると言える。ただし、すぐに使用することは難しく、使用方法を学ぶ時間が必要である。また、小学生などは目的以外に使用することも想定されるので、使用の際の約束なども決めておく必要があると考えられる。

最後に、授業の感想を表5にまとめた。表5から、学生の多くが旭川市の課題について知る機会になったと記述している。また、自分にできることを考える機会になった、市の問題が身近に感じられたなどの記述からもわかるように、学生の多くは、自分の住む町の課題についてはあまりよく理解していないし、自ら興味を持って知ろうとはしていない。この現状を踏まえると、講義や研修等で、自分の住む町について知り、課題を考えさせる機会を意図的に作っていく必要があると思われる。

表5 授業の感想

項目（総数）	内 容	記述数
地域課題について（15）	市の課題について知る機会になった	9
	自分に出来ることを考える機会になった	2
	市の問題が身近に感じられた	1
	各問題のつながりを知ることができた	1
	自分の意識の低さを実感した	1
	問題が分類できることがわかった	1
授業形態について（3）	授業形態が参考になった	1
	市のレベルだと考えやすいことがわかった	1
	市から広げていけるので良い	1
ICTについて（1）	ICT活用による意見のまとめ方が参考になった	1
合計		19

4. まとめ

本研究では、家庭科教師としての指導力を高めるため、大学生を対象に、旭川市の課題を理解し、課題を解決するための家庭科の授業を開発し、中等家庭科教育法Ⅲで実施した。そして、学生の地域課題に関する理解と対応について評価するとともに、ICT活用や地域課題の教材化の有効性についても検証することを目的とした。結果は以下の通りであった。

- ① 地域課題については、学生の興味は低く、よく理解はしていないが、知る機会を与えると意欲をもって、自分にできることを考えようとする。
- ② 授業を通して、学生は旭川の課題を理解し、その解決策を考えることができた。
- ③ 地域課題の教材化については、難しさがあると感じている学生が多かった。
- ④ ICTの活用は意見を共有したり、まとめたりする上でとても便利であると学生は捉えていた。

今回の授業では、旭川市の課題を取り上げたが、学生の多くは旭川の現状についてよく理解していないし、課題が何かもわからないでいた。そのため、授業を通して、旭川市の課題の深刻な状況を知り、とても驚いていた。市政に関してはホームページやパンフレットなどで頻繁に発信しているものの、それらを自分事として意識していない状況がわかった。このことは旭川市に限ったことでも、本大学の学生に限ったことでも

ないと思われる。どこの市町村においても、どこの大学の学生においても、地域課題について理解していないのは予想できることである。しかしながら、学生が地域課題について全く関心がないわけではなく、考える機会がなかったから無関心にならざるを得なかったと思われる。授業を通して、学生は旭川市の課題の解決策を真剣に考えていたし、一部ではあるが、こうした教育の必要性も述べていた。地域課題を解決する担い手を育成するためには、大学教育の中にこうした講義や研修が必要であると考え。

また、小中高等学校学習指導要領解説家庭編を見てもわかるように、地域課題を解決する担い手を育成する教科として家庭科は求められている。地域課題を取り入れた授業開発がこれからの家庭科教師が求められる専門的力の一つである。このことから、家庭科教師自身が地域を知り、地域課題を見だし、解決するという経験が必要であることは言うまでもない。

今回は、ICTを活用しながら、旭川市の課題を解決するための授業を試みたが、ICTの利便性がよく理解できた。地域課題を解決する担い手を育成することを家庭科から寄与するためにも、ICTの有効な利用法や授業内容の改良・進化を続けることで、よりよい授業を提供していきたい。今後も、研究を継続し、その情報を発信していきたいと考える。

引用文献

- 1) 小牧瞳. 他地域における事例を通して地域課題の解決について学ぶ授業の開発. 授業実践開発研究. 12, 23-32, 2019.
- 2) 文科省. 小学校学習指導要領解説 家庭編. 東洋館出版. 2018.
- 3) 文科省. 中学校学習指導要領解説 技術・家庭編. 開隆堂. 2018.
- 4) 文科省. 高等学校学習指導要領解説 家庭編. 教育図書. 2019.
- 5) 柳昌子. 家庭科における「地域」の教材化-3-教師性の発達と「地域」. 福岡教育大学紀要. 第5分冊, 芸術・保健体育・家政・技術科編. 49-58, 1977.
- 6) 久保加津代. 地域に根ざした生活力の育成: 授業実践報告に見る九州各県の地域に根ざした家庭科の課題. 日本家庭科教育学会球種地区会共同研究. 1-4, 2006.
- 7) 小澤紀美子. 持続可能な社会をつくる家庭科. 日本家政学会誌. 64(6), 321-324, 2013.
- 8) 荒井紀子. 現代社会の課題と家庭科教育の役割. 日本家庭科教育学会誌. 62(1), 43-47, 2019.
- 9) 桑畑美沙子, 浅井玲子, 伊波富久美, 今村桂子, 國吉真哉, 久保加津代, 倉元綾子, 立山ちづ子, 福原美江, 宮瀬美津子. 九州・明菜和の「生活課題」「生活文化」にかかわる家庭科の授業研究(第3報) - 「生活課題」と「地域再生」として扱われた学習内容の検討 -. 日本家庭科教育学会誌. 52(4), 263-271, 2010.
- 10) 大竹美登利, 日景弥生. 子どもと地域をつなぐ学び-家庭科の可能性-. 東京学芸大学出版会. 151-156, 2011.
- 11) 田代高章, 鈴木誠, 山本公恵. 地域課題探求型の「総合的学習の時間」の実践的意義と課題. 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要. 7, 2, 2008.

(岡田みゆき 旭川校教授)

(山口菜々子 旭川校4年生)

